天空

糸雨　冷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天空

【Ｎコード】
Ｎ０９７９ＢＡ

【作者名】
糸雨　冷

【あらすじ】
大学生の涙月は帰り道の公園で不思議な青年と出会う。
人間離れした色彩を持つ青年といたって普通の女子大生の雨降る季節の物語。

前編

桜も散って、新緑の季節も過ぎ、梅雨の時期になった。
いつもの学校の帰り道、いつもの公園で、私はいつもと違うものを見つけた。

雨の中、傘もささず、一人たたずむ綺麗すぎる君。

日本人としてもありえない、薄紫の長い髪に、深い綺麗な色合いの濃紺の瞳。
その大きな濃紺の瞳から、止まることなく透明な涙が流れていることになぜ気づけたのか、
今考えてもわからない。

「何で、泣いてるの。」

気づいた時には私は、君に声をかけていて。
私の問いかけに気付いた君は、ゆっくりとした動作で、私を見る。
正面から見たその顔は、まるでアンティーク人形のように整っていて。

「なんでだと、思う？」

淡く響く、テノールの声。

その綺麗な顔を悲しげに歪めて、君は問う。
その顔に、神に降り注ぐ雨さえも、すべてに現実味がなくて。
君の周りのすべてが、君の美しさをひきたてる。

「うちに、こない？」

気づいたら私は、君の腕を引っ張って、自分の傘の中に、そして家の中に君を招き入れた。

これが私と、君の始まり。

＊＊＊

「はい、どうぞ。」

温めたミルクに、少しだけ蜂蜜を入れたものを、君に差し出す。
小さく頭を下げてそれを受け取った君の手は、思ったとおり傷一つなく、雪のように白く滑らかだ。君の動作の一つ一つに合わせて、肩にかかった、長い薄紫の髪が揺れ、ほのかな香りが漂う。

長い薄紫の髪と濃紺の瞳。
雪のように白い肌と作られたかのように整った顔立ちの一七〇ほどの身長の少年。
綺麗な女物の着物に身を包んだその躰は女にしてはしっかりしてい

るようにも思えるが、
男にしてはやっぱり華奢で。
彼が声を出さなければ女かと間違えたかもしれないほどに少女めいた顔立ちをしているが、
声の高さから考えてきっと男だろう。

「私は、水端　涙月。君の名前は？」

私が尋ねると、君はゆっくりとした動作で瞼を伏せる。
髪と同じ色合いの長いまつげが、滑らかな頬に影を落とす。

「桜歩。今宵野　桜歩、だよ。
でも、多くの人が、天姫って呼ぶ。
天の…手の届かないお姫様、という意味を込めて。」

静かに語る桜歩の声が、耳に心地いい。
水のように、雨のように緩やかに私の中に浸みこんでいく。

「あの、もし…行くとこないんだったら、うちにいてもいいよ？」

突然の私の申し出に目を丸くした君は、すぐに眉をしかめる。

「君…「涙月、だよ。」

名前を呼ばない桜歩の言葉を私が遮ると、桜歩は呆れたように溜息をつく。
その様子は高校生ほどにしか見えない彼の容姿には似つかわしくないもので。
だけどそれを体現する彼は、その様子が似合う“大人”に見えて。

「涙月さんは独り暮らしでしょう？
それなのに見知らぬ男を家に上がらせ、
その上ここにいればいいだなんて如何なものかと思うんだけど？」

ふわふわとどこか頼りなさげな声で、しっかりとしたことを、桜歩は言う。
そのアンバランスさが、ひどく耳に心地よい。

「別に、大丈夫よ。私、年下には興味ないもの。」

桜歩があまりにも美しいから、思わずのまれそうになってしまい、
私は慌ててそんなことを言う。
そんな私に気付かないのか、それとも気付かなかったふりをしてくれたのか、
桜歩は小さくため息をつく。

「僕、たぶん君より年上だと思うけど？

まぁいっか、どうせ行くところないし、お言葉に甘えて、ここに置いてもらおうかな。」

そう言って桜歩は、ミルクの入っていたマグカップを持ち、立ち上がる。
長い薄紫の髪がその動作に合わせて揺れ、甘くやわらかな、桜の花に似た香りが漂う。

「桜歩、どこにいくの？」

私の横を通り過ぎて行った桜歩を追って行ってみると、
キッチンで泡のついたスポンジとマグカップを持って立っている。

「置いてもらうんだし、洗い物くらいしようと思って。」

そう言った矢先、お約束のようにマグカップは桜歩の手から滑り落ち、ガチャンと音をたてた。

＊＊＊

桜歩を拾って数週間。

桜歩は料理もできない、洗濯もできないなど、まったく家事ができ

ないことが判明した。
ついでに買い物に行かせたら迷って迎えに行く羽目になった。

「桜歩、あんた今までどういう生活してたわけ？」

私の問いに、桜歩は思い切り目をそらす。
ついでに桜歩は高校生程度にしか見えない外見をしていながら、実年齢は二十三らしい。
びっくりなことに、私より年上だ。

「家事ができないのは、家がとても裕福でする必要がなかったから。すぐに道に迷うのは・・・病弱で家から出たことがなかったから道の覚え方がわからないんだよ。」

桜歩のその言葉に私はぽんと手を打った。

「あぁ、だから桜歩は綺麗なのね。」

私の言葉に眉をしかめる。
その様子さえもひどく綺麗で、男のくせに卑怯だなんてわけのわからないことを考える。

「何それ？話のつじつまが合ってないんだけど？」

「失礼ね、ちゃんと合ってるわよ。
だって私が綺麗だっていったのは、桜歩の立ち振る舞いのことだもの。」

私がそういうと、桜歩は納得したかのように小さく笑う。
ひどく綺麗で・・・儚げで・・・心が、囚われる。目が、離せなくなる。

「うちの家は代々接客業を営んでいてね、いくら病弱であっても僕は1人息子だったから、
ちゃんと跡目を継げるようにって作法だけはしっかりと教えられたんだよ。
・・・・・・？どうかした？」

ぼうっと桜歩を見つめる私を不思議に思ったのか、桜歩は首をかしげて私の顔を覗き込む。

濃紺の瞳に、心が囚われる。
きっとこのままでは、私は桜歩に恋をする。

「わ、私、明日までの宿題があったんだった。
やらないと間に合わないから、やってくるね。おやすみ、桜歩！」

いきなりそんなことをいって立ち上がった私に驚いたのか、桜歩は濃紺の瞳を丸くする。

「う・・・うん、おやすみ・・・」

そのまま桜歩のほうを振り返ることなく、私は自室に引っ込んだ。

＊＊＊

どうしても眠れなくて、こっそり涙月さんの家を抜け出し、あの日
僕がいた公園にやってきた。
こんな風になってしまっても、僕は物に触れられるらしく、降り注
ぐ雨を避けるため、
涙月さんの傘を無断で借りてきた。

彼女はもう、夢の中だろうから。

「樋摘・・・ごめんね。」

アメゾラにむかって、小さくつぶやく。

僕が生きていた場所においてきてしまった、僕の最愛の人。

泣いて、いないかな？

初めて逢った日に好きになった、５つ年下の女の子。

僕の家は代々続く遊女屋で、彼女はそこに売られてきた少女の1人だった。

幼いころから僕は、一日の大半を布団の中で過ごすほどに病弱で、それでもやっぱり1人息子だったから、僕が跡目を継いだ。
二十歳まで生きられないと言われていた十八歳の僕の求婚を、たったの十三歳だった彼女は受け入れてくれた。

「樋摘・・・。」

二十年で尽きてしまうはずだった僕の命は、それでも二十三になるまで生きることができた。
でもやっぱりあまりにもちっぽけな僕の命はそれ以上続くことなく、二十三の誕生日を迎えたあの日、ついに尽きてしまった。

死んだはずの僕は、気付くとこの公園にいた。

きっと僕は幽霊と呼ばれる存在で、この地にいられる時間も、きっと長くない。

「ねぇ・・・樋摘？最後に・・・もう一度、だけ・・・。」

後編

静かな、静かなこの屋敷の中、愛しい貴方に逢えた。
ここは何よりも、愛しい世界。

「樋摘様も御可哀想に・・・。まだ御若いのに桜歩様に先立たれて・・・。」

あの方が亡くなられてから、店の中ではひっきりなしにそんな声が聞こえる。
だけど私は、自分が可哀想だなんて思えない。
私は未亡人となったけれど、不幸なんかじゃない。

桜歩様と出逢って十年。
桜歩様の妻となって五年。彼の妻となることを決めたあの日、二年しか共にいられないことを…十五で未亡人となることを、私は覚悟していた。
それなのに二人物子供をもうけ、五年も彼に添うことができた。
それは何よりも幸せなこと。

「樋摘は・・・永久に桜歩様を愛しています。」

愛しい貴方が、空の上でちゃんと笑っていられるように。
私はそれを願って、貴方のいない世界で強く生きていきます。

七月某日、我が家のリビングに薄紫の髪の男が力なく転がっている。

「暑い。」

長い薄紫の髪をひとつに結った桜歩は、どうやら暑さに弱いらしい。
本人が言うには、もともと住んでいたとこはもっと涼しいんだとか。
確かに現在涙月の家はクーラーが壊れていて扇風機に頼っているの

で、文句を言いたくなるほどに暑い。

「暑いって言ったって夏なんだから仕方ないでしょ。
だいたい、いい大人が昼間からごろごろするのはやめなよね。」

涙月が文句を言うと、桜歩は寝転んだまま間延びした声で返事をする。

「申し訳ないけど、僕の仕事時間帯は深夜だったから昼間はだいたい寝てましたー。」

夜間に営業する接客業。
いかがわしい職業しか思いつかなかったので、涙月は追求を諦める。

「でもさ、アンタのまわり、変に涼しいんだけど。」

異様なものを見るような目つきで、涙月は桜歩を見る。
冷気を漂わしている人間なんてありえない。

「涙月さん、ホラー平気？」

体を起こし、うちわでパタパタと扇ぎながら桜歩が聞く。

ひとつに纏められた桜歩の薄紫の髪が小さく揺れる。

「桜歩は、ホラー好きなの？
というか、まったくもって話のつながりがわかんないんだけど・・・
。
まぁ悪いけど私はホラー嫌いだから、うちにはひとつもないよ。」

涙月の言葉に桜歩は元の寝そべっていた体制に戻る。
本人が言うにはフローリングの冷たさが気持ちいいんだとか。
汚れが気になるところだが、そこは本人がきっちり毎日寝そべる前
に掃除している。

「僕はホラーなんて見ないよ。
何が怖いのかも何が楽しいのかもわからないからね。
そしてホラー苦手なのならさっきの答えは追及しないほうがいいと
思うけど？」

そう言ったきり、桜歩は昼寝モードに突入する。
昼間は起きていると眠くなるとことか、本当に彼は夜型人間らしい。

「ん？ちょっと桜歩！そこで寝るな。」

涙月がそう言った頃には桜歩はすでに夢の中だった。

夜になると、とたんに感じなくなる。
暑い寒い、ぬくいつめたい、昼間はちゃんとわかったそれらが、夜になるとまったく感じなくなる。
感じるのは、生きていない自分の体の不確かさだけ。

「そろそろ・・・かな。」

一度死んだ僕は、気付いたらここにいた。
死んだら無に帰るのだとばかり思っていた。

それなのに僕は、僕という存在のままここにいる。
樋摘さえいない、この場所に。
「樋摘…逢いたいよ。」
だけど二度と、彼女に逢うことは叶わないだろう。
近頃の日課になっていることは、ひどく近所迷惑なことだ。

「こらーっ起きやがれ、この、童顔紫女顔男ーっ」

私がいくら叫んでも、完全夜型で超低血圧の桜歩はうるさいとでも言いたげに身じろぎするだけで、起きる気配すらしない。
騒音とでも言うべき私の叫び声から逃れるためか、桜歩はタオルケットの中にもぐりこむ。
その姿は私よりも遥かに愛らしくてそれが非常にむかつく。

「こら、聞いてるの？起きろっつってんの・・・よ・・・。」

文字通り桜歩を叩き起こすべく、私は腕を振り上げた。
そして確かに振り下ろしたはずなのに、何で手ごたえがない・・・？
自分の手のほうに視線を向けてみると、私の手はさほの体を通り抜けていて・・・。

確実に、空気が凍った。

「いやあああああ――――っ」

寝ていた僕は、女の叫び声によってお世辞にも爽やかとは言えない目覚めを遂げた。
ゴキブリが出たのかもっと物騒なものがでたのかはわからないけど、僕は愛しの彼女の名前を呼ぶ。

「樋摘、樋摘っ？いったい何があったの？」

彼女の名前を繰り返し、はたと気付く。
自分の口走ったことの馬鹿さ加減に、僕は頭を抱える。

ここに愛しい樋摘はいない。
ここにいるのは、僕と涙月さんの二人だけ。

「涙月さん、朝っぱらからいったいなに叫んでるの？」

僕がそう聞いても涙月さんは真っ青な顔をして僕を指差して口をパクパクさせている。

はっきり言ってわけわからないし、怪しいことこの上ない。

ほっといたら元に戻るかと思って待ってみたけど、
依然そんな感じなので僕はそんな涙月さんの相手をしてあげるほど
優しくもなく、何か食べるものはないかと台所のほうに向かった。
目が覚めたらおなかがすいていることを、実感したんだよ。

こちら涙月、現在桜歩の観察中。
朝起こすとき、私の手は桜歩の体を通り抜けたけど、それをも一度
確かめようとしても桜歩はするりと交わしてしまい、確かめようが

ない。

「桜歩は病弱でほとんど部屋から出なかったとかいったけど、その割に反射神経良すぎると思うんだけど。」

そう言った私に、お皿を洗っていた桜歩はにっこりと笑いかける。働くもの食うべからず、私は桜歩を拾ってからお皿を割らずに洗う方法を覚えてもらった。

「大人にはね、人生いろいろあるんだよ。」

そう言った桜歩の笑顔が有無を言わさぬものだったので、私は追及を諦めた。

どうせ一応二十歳すぎてると文句を言ったって、「僕よりは子供でしょう？」とか「去年までは未成年だったでしょう？」などと言われてしまうので口答えは致しません。

近頃気付いたことだが、桜歩はさりげなく圧力をかける。

静かな雰囲気で人に強制させるから、桜歩の彼女は大変だろうな、なんて思いながら、桜歩に惚れてしまった自分の馬鹿さ加減に完敗。うん…いつの間にか、ね。仕方ないよね、好きになっちゃったものは。

「何一人で百面相してるの？」

そんな声に顔をあげると、至近距離に桜歩の顔。
思わず私は息をのむ。それにしても本当に、ムカつくほどに綺麗な顔。

「え…と、桜歩は腹黒だから、彼女さんは大変そうだなって、思って。」

私は適当に、そんなことを言って取り繕う。
その言葉によって、思いもよらない事実を聞かされる羽目になるなんて知らずに。

「失礼だねぇ。僕は腹黒なんじゃなくって、世渡り上手なだけ。
それに僕は奥さんにはひたすら甘かったので、そんな心配はいらないんだよ。」

桜歩の言葉に、私はぴたりと動きを止める。今…なんて言った？

「桜歩…今、なんて？」

明らかに様子がおかしいだろう私に、桜歩は首をかしげる。
紫の髪が小さく揺れ、綺麗。

「今って…そんな心配はいりません？」

「そうじゃなくって…もう少し…前。」

ドキドキと、心臓が音を立てる。
お願いだから、違うと言って…？
そんな私の願いは、当たり前のように打ち砕かれた。

「あぁ…もしかして、“奥さん”？
そう言えば言ってなかったね。
僕、既婚者なの。結婚五年目で、四歳の女の子と二歳の男の子がいる。」

結婚、五年目。
桜歩は二十三歳だと言ったので、十八歳の頃には結婚していたということになる。
四歳の娘がいると言うことは、結婚して一年…つまりは十九歳の時には、もう子供がいた。
私は今、二十歳で、つまり桜歩が私の年の頃には、桜歩はもう奥さんがいて、子供いて、桜歩に大切にされていた奥さんは、二人目の子供を身籠っていた。
なんか…ショックだ。
失恋した、と言うだけじゃなく、なんだかショック。

「桜歩、奥さんはいくつだったの？」

気分転換、になるかはわからないけど、そんなことを聞いてみる。

桜歩が十八で結婚したというのだから、もしかしたら奥さんは、私と変わらない年なのかもしれない。

「樋摘は…十八歳だよ。」

ヒヅミ。

「今、十八歳？」

確かめるために聞いた私の言葉に、桜歩は首をかしげる。
もしも、今十八歳なのだとすると、結婚した時奥さんは、十三歳。

「うん、樋摘は今十八歳だよ？」

現在日本では、女の子は十六歳にならないと結婚できない。
桜歩の奥さんが十三歳で結婚したというのなら、きっと桜歩は…どこか、遠いところの人。

ゆらり夜空に浮かぶ、樋摘の髪色に少し似た、丸いもの。
それは黄金色に輝き、僕を見下ろす。
天姫殿から、それが見えたことはなかった。
涙月さんは、それを“ツキ”と呼んだ。
魔性の輝きは僕を虜にし、ひどく懐かしい気持ちにさせる。

月が…恋しい。
夜中にふと、目を覚ます。
なんだか不安に駆られて、窓の外…公園を見下ろす。
そこにいたのは、見間違えることのない長い薄紫の髪を持つ、綺麗すぎるほどに綺麗な男。

「桜歩？」

じっと立ち止まり月を見上げるその姿は恐ろしいほどに美しく、窓から見たその光景は幻想的な一枚の絵画のようで。

いっそう不安をかきたてられ、私は上着をひっつかみ、夜の公園へと飛び出した。

何が起こるのかさえ、知らずに。

丸い、輝く月に向って、桜歩はゆっくりと手を伸ばす。
金色の光が桜歩を照らし、薄紫の髪が、風に僅かに揺れる。
かぐや姫のように、月に帰ってしまうんじゃないかと思って、私は慌てて彼の名を呼ぶ。

「桜歩っ」

私が呼ぶと、桜歩は月へ伸ばしていた手を下げながら、ゆっくりと私を見る。
濃紺の瞳が優しい色を映し、にっこりと微笑む。

「どうかしたの？涙月さん。」

どうかしたの、だなんてしらじらしいと思う。
桜歩が気付いてないだなんて、そんなことあるはずないのに。

初めて出会った日に来ていた、とても綺麗な女物の着物。
それに身を包んだ桜歩の体が、うっすらと透けて、その向こう側になる景色が見える。

「桜、歩……あんた…。」

震える声で紡ぎだした言葉は、最後まで言うことさえできなくて。
そんな私を見て、桜歩は苦笑する。
優しくて、切ない…美しすぎる天女の微笑み。

「ホラー苦手だって言ってたし、こんなとこ見せるものじゃないから、涙月さんが寝てる間に、済ませようかと思ったのにな。」

凛としたテノールの声が、悲しげな色合いを醸し出して響く。
声はこんなにもはっきりと聞こえるのに、彼の姿だけはどんどんと無色に近づいて、儚げに透き通っていく。

桜歩が、消えていく。

「元々いた場所に…樋摘さんのところに帰るの？」

それは私にとって、望みであったのかもしれない。
だけど桜歩は苦笑して、その様子がひどく悲しげで…桜歩のことを、遠い大人に感じた。

「僕ね、生まれつき体が弱かったって言ったでしょう？
二十歳まで生きられないって言われてた。
それでも僕は、二十三歳まで生きて、奥さんももらって子供もいて…幸せだったよ。
とても…。」

半透明になりながらも、美しい薄紫の色をした桜歩の髪が、風に舞う。
そのまま透明になってしまうと思っていた桜歩の体は、さらさらと音を立てて、足元から砂のように消えていく。

「桜歩っ」

私の声は、桜歩のもとに届かない。
なぜならそれは、桜歩の目に映っていたのは、私じゃないから。

「ただ…一つだけ望むなら……もう少しだけ、樋摘と一緒に、いたかったなぁ…。」

髪と同じ色合いの長いまつげに縁取られた濃紺の瞳から、透明な雫が、一つ零れ落ちた。

乾いた地面に小さな涙の跡を残し、薄紫の髪と濃紺の瞳を持つ幽霊は、消えてしまった。

『でも、多くの人が、天姫って呼ぶ。天の…手の届かないお姫様、っていう意味をこめて。』

天女は、空へとかえっていった。

番外編

ここに私が売られたのは、八歳になったころだった。
裕福なものは裕福、貧しいものはしばしば子を売らねばならない状況になる時もあって…。
そんな状況に貧しい我が家が陥った時、白羽の矢が立ったのは、末娘であった私だった。

癖のある長い山吹色の髪も、大きな深紅の瞳も、兄弟の中ではもちろん、さまざまな色合いを持つ人がいる我が国でも群を抜いて美しかったから。

初、と名乗る女衒に連れられ、ひどく豪華で、幻想的な建物に入る。花街からは少し離れた場所にあるそこは、表向きには料亭を営んでいるが、裏と呼ばれる部分では高官御用達の遊女屋となっているとか。

「それじゃ、この娘の額はこれでいいな。」

ひどく美しいこの店の、ひどく美しい主が、誰が相手でも口調が変わらない初に苦笑しつつも、金額を支払う。
私の価値を、現金化したもの。
初が言うには、ここは天姫殿と言って、その主は天姫と呼ばれるらしい。

薄紫の髪と濃紺の瞳、人形よりも整った顔立ちは遺伝として何代も続き、天女のように美しい女を抱ける遊女屋の、手の届かない存在としてもてはやされていた。

もちろん遊女屋の主なのだから、男であるのだが。

「じゃあ今日から君は、うちの子だね。名前は…樋摘にしようか。」

十六代目天姫であった彼がそう呼んだから、私はその日から樋摘になった。

ゆらり、揺れる長い薄紫の髪。

今日は偶然か幸運か、体調が良かった。

だから少しばかり布団を抜け出て、屋敷の中を散策する。

自分の家の中だけでも広いから、充分散歩になる。

表の料亭の部分と、来年彼が継ぐ裏と呼ばれる遊女屋の部分。
その二つの邸をつなぐ中庭には、大きな桜の木が埋まっている。
彼が生まれた年に、彼の父が植えたというその桜の木。

彼の桜歩と言う名前には、その桜の木と共に長き時を歩いて行け、
と言う意味が込められているらしい。

その桜の木の前を通った時、かすかに声が聞こえた。
耳を澄ませてみると、声の主はどうやら桜の木の上に登っているよ
うで。

満開の桜の木の上に登り、歌う少女の声が聞こえる。
おそらくこの家にいると言うことは、売られてきた子供なのだろう。
つまりは天姫殿の遊女か禿。確かに今は彼女たちが仕事をする時間
よりも早いけど、なんでこんなところで木登りをしているのだろう。

かすかに聞こえる少女の歌声は耳に心地よく、歌う少女の姿を見た
いとさえ思う。
それに彼の立場からすれば、裏と表の境界線ともいえる桜の木に登
る彼女を、咎めなければならない。

桜歩は、十七代目天姫となる十六代目天姫の一人息子だから。

するすると身軽に、桜歩はその大きな桜の木に登っていく。
桜歩は日常のほとんどを布団の中で過ごさなければならないほどに
病弱だが、別に運動神経が悪いわけではない。
どちらかと言えば運動神経はよく、身軽である。

歌う少女の斜め下、彼女の視界には入らない絶妙な位置にある枝に腰掛け、桜歩は彼女の様子をうかがう。
どうやら彼女はまだ桜歩に気付いていないようだ。

山吹色の長い髪は、桜歩のまっすぐの髪とは対照的に柔らかく波打つ。
伏せられた瞳は髪と同じ山吹色の長いまつげに縁取られている。
白く滑らかな肌も、端正な顔立ちも、美しい女が多い天姫殿の中でも群を抜いていて。

それでもやはり、天姫になるべくした容姿を備える桜歩の方が格段に美しい。

「そんなところにいると、危ないと思うよ。」

それが天女となる運命を背負った桜歩と、遊女となる運命を背負った樋摘の、二人がただの少年と少女でしかなかった頃の、出逢い。

ゆらり、視界の端に映る薄紫。
その色に反応してしまうようになった自分に苦笑しながらも、予想通りの人がいてくれたことに、私は顔を綻ばす。

現世の天女とでも呼ぶべき、十七代目天姫の名を継承した、今宵野桜歩様。

私、樋摘の好きな人であり、私が働く遊女屋の楼主様でもあります。今年十八歳になられました桜歩様のもとには、あまたの縁談の話が届き、しかし当の本人はそれをすべて断っているようで。

そして近頃、店の者…白妙と何やら言い争う姿をよくお見かけします。
そして…今日も。

「わかってる、わかってるよ。君の言い分はちゃんとわかってる。」
「いいえ、わかっていると言ってもちっとも理解してはおられない。あれは貴方様のお相手とするにふさわしくありません。」
「わかってる…っ。もう、いいからさがってよ。」

「貴方様がなんと言おうと、あれを選ぶことは許しません。貴方様は…天姫なのですから。」

と、こんな風に。

そのような日常をお過ごしの桜歩様は、本日このようなところで何をなさっているのでしょうか。
天姫殿の表と裏のちょうど間にある大きな桜の木。
なぜ桜歩様はその桜の木にもたれて眠っていらっしゃるのでしょう。
桜の木に背を預け眠る桜歩様、そんな彼の前に立っている私…そんな二人の頭上から、桜の花びらが降り注ぐ。

淡い色合いの、薄紫の長い髪がさらさらと揺れて、同じ色合いの長いまつげが陶器のように滑らかな彼の頬に影を落とす。
顔立ちは人形のように整っていて、纏う空気は洗練とされつくしたもの。

天の…手の届かない御姫様。
天姫の名にあまりにもふさわしい、私の最愛の人。

「ここで初めて、貴方様にお逢いしたあの日から、樋摘はずっと、桜歩様をお慕いしております。」

小さな声で紡ぐ、私の貴方への恋心。私はもうすぐ遊女となる身、
そして貴方は天姫殿の主。
それは、許されない想い。

「僕も同じ気持ちだ、と言ったら君はどうする？」

形のいい唇が開かれ、淡い雰囲気を醸し出すテノールの声が紡がれる。
長い薄紫のまつげがかすかに動き、ゆっくりと濃紺の瞳が現れる。
濃紺の瞳に、心が捕らわれる。

「あ…あの…っ、今、なんと…？」

慌てた様子の私に、桜歩様は小さく微笑む。
そして蝶の羽がかすめたような軽やかな口付けを、私の唇に落とす。
驚いて目を見張ると、至近距離に彼の美しすぎるほどに美しい顔。

「残念だけど、まだ途中だから二度目は言ってあげないよ。
完成したら…君を攫いに来る。
だから待っていて、樋摘。」

そう言って桜歩様は、座り込んでしまった私を置いて、長い薄紫の髪を揺らし、去って行った。

それから数日後、白妙を丸めこんだ桜歩様が、私に求婚してくださったのは、ここだけの幸せな話。
涙を零しながら言った私の返事は、きっと誰もがわかること。

ゆらり、風に乗って揺れる薄紫。

結婚して一年、僕と樋摘のあいだには子供が生まれた。
生まれたばかりの娘の頬をつついて遊んでいた僕に、いきなり樋摘が謝ってきた。

「桜歩様…ごめんなさい。」

何について謝られたのか全く分からず、僕は首をかしげる。

「男の子じゃないと、いけなかったのに…。」

そう言われ、やっと僕は何について樋摘が謝っていたのかを理解する。
天姫殿の核となっている遊女屋は、男でないと継げないから。

「樋摘、白妙に何言われたかは知らないけど、謝らなくていいよ。
まだまだ先は長いんだしね。」

そう言って僕は、小さな娘を膝に抱き上げる。
僕の薄紫の髪とも樋摘の山吹色の髪とも違う、灰色の髪を持つ僕たちの娘。
聞いた話によると樋摘の母がこの色を持っていたらしい。
きょとんとを見上げるその瞳は、僕と同じ濃紺の色をしていて。

「でも…。」

「樋摘、大丈夫だよ。それとも樋摘は、僕の言葉が信じられない？」

「いえ…そう言うわけでは…。」

僕はずるい。
樋摘の言いたいこと、ちゃんとわかってるのに、わざとこういう言い方して樋摘を丸めこむ。

僕は今年、十九歳になった。
五つ下の樋摘は、十四歳になった。
幼いころから体の弱い僕は、生きられても二十歳までだろうと言われている。

「それより僕は、樋摘がなんでメリアムって名前を付けたかのほうが聞きたいんだけど。」

僕がそう聞くと、樋摘は驚いたように飛び上る。
え…？樋摘はメリアムって名前に疑問を持たないの…？
まぁ疑問を持たないからそうやって名付けたのかもしれないけど。

「えぇっ、ダメでしたか？メリアムって可愛くないですか？」

「可愛いか可愛くないか聞かれたら、可愛いのかもしれないけど、なんでカタカナなの？
まずその名前はどこから出てきたの？」

「えっと、私の好きなカタカナを並べて作りました！」

「……そうなんだ。」

なんだか僕の可愛いお嫁さんは、少し変な子みたいです。

並ぶ薄紫、ゆらりと揺れる。

あれから二年過ぎた桜の咲き誇る日、私は男の子を産んだ。

薄紫の髪、濃紺の瞳…桜歩様と、瓜二つの容姿。

桜歩様は幼い息子を抱き上げ、その顔をじっと見つめる。

愛しくて…微笑ましい光景。

「うちの家って、なんでこうも産まれる男の顔がみんな一緒なんだろう。」

そんなことを言って、桜歩様は真剣な顔で息子を見つめる。
そんな桜歩様の膝には、二つになった娘が座っている。
大切な、私の家族。

「でも、遺伝されているのが綺麗な顔なんだからいいじゃないですか。」

「男の顔ばかり綺麗でもしょうがないでしょう…。
それに、同じ年の頃を選んで並べたら、自分と父様の見分けつかないと思うよ。」

確かに桜歩様の言う通り、先代である義父様と桜歩様も、桜歩様と息子も顔がそっくりだ。

「しかもみんな、顔がよく伸びる。」

そう言って桜歩様は、むにっと我が子の頬を伸ばす。
あんまり伸ばすと戻らなくなるんじゃないかと心配していると、私はどうやら桜歩様を凝視していたらしく、桜歩様は私の方を振り返る。

「あぁ、ごめんね。子供たちばっかりにかまって。樋摘もおいで。」

にっこりと綺麗な笑みを浮かべて桜歩様が手を差し出すので、私は彼の膝を占拠していた娘を抱き上げ、彼の隣りに腰をおろした。

息子と娘と、私と桜歩様。

それは家族の、何よりも幸せな時間。

ゆらり、雪が舞う。
淡い紫の…薄紫の髪が、雪が舞う風に踊る。
時が止まってしまったかのように美しいその光景は、彼に声をかけるのに戸惑ってしまうほどに幻想的で……。
そんな時はいつも、私が声をかけるよりも先に、貴方は私に気付く。
そして、優しくて柔らかで、どこか陰のある笑みを浮かべるのだ。
それは今にも消え去ってしまいそうなほどに美しく、儚くて鮮やかな、桜吹雪のように美しい微笑み。

「どうしたの、樋摘。」

「どうしたの、じゃありません。
近頃体調がよろしくないのに、なんで貴方はそうやって布団から抜け出すんですか。」

私が怒っても淡い微笑みを崩さない、私が知るなかで一番美しい、私の最愛の人。
私を、一番愛してくれた人。

「でもね、樋摘。布団の中でじっとしてるのって結構暇なんだよ。」

「そう言う問題じゃありません。体調が悪い時は寝ているべきです。」

私がそう言うと、貴方はまた笑う。
その微笑みがあまりに儚くて、私は不安になる。
消えないで、いなくならないで……置いて、いかないで。

「樋摘、おいで。」

優しい声で私を呼び、優雅な動作で私に手を差し出す、私の一番愛しい人。
彼へと一歩、私が足を進めると、彼は私の手を引っ張って、私は彼の胸の中に抱き締められる。
優しく、でもしっかりと。

「ごめんね、樋摘。誰よりも、愛してるよ。」

そう呟いた日の夜更けに、桜歩様は私の手の届かない所に行ってしまった。

ゆらり、風に舞う桜色。

裏と表の間にある、彼が生まれた年に植えられた桜の木。

「母さん？」

桜の木を見上げる私に声をかけたのは、初めて逢った頃の彼…ではなく、愛しい彼と同じ容姿を持つ、彼と私の息子。

「用意できたよ。」

声変りもまだの少女のような声色の少年は、長い薄紫の髪を白い簪で結いあげて、重たげに裾を引きずった遊女のような衣装にその幼い体を隠す。

あれから、十年。

今年十二歳になった私と彼の息子…竜里は今宵、天姫殿の十八代目の当主…天姫となる。

「またその桜を、見てたんだね。」

「えぇ…だって貴方のお父様に、求婚の予告をされた、思い出の場所だもの。」

「求婚の予告って、すごく意味がわからないのだけど。」

彼によく似た顔で、竜里は彼がしたように首をかしげる。
それが何だかおかしくて、私は小さく笑う。

「いいのよ、竜里にはわからなくて。
私と桜歩様だけ、わかっていればそれでいいの。」

見上げる、桜の木。
降り注ぐ、桜の花びら。
柔らかく微笑んだ、私だけの天女様。

あの人が私だけの天女様だったのと同じように、この幼い子も誰か一人だけの女の子のために、その一人のためだけの天女になる日が来るのだろう。
手の届かないところのお姫様であるはずの天姫は、そうやって何代も何代も、誰か一人だけの手の届く場所に降りてくる。
桜歩様が、私一人だけのために降りてきてくれたように。

「先に行ってなさい。私もすぐに行くから。」

そう言うと、彼によく似た新しい天女は、彼と同じ薄紫の髪を翻して歩いて行った。
私もいつか、貴方のいる場所へ向かうでしょう。それまで待っていてくれますか、桜歩様…？

『誰よりも、愛してるよ。』

「私も貴方を愛してますわ。我が愛しの天女様。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0979ba/

天空

2012年1月2日04時46分発行